

チェンマイ大学での貢献 (30)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では、これまでに筆者が関わった関係機関とその関係者（研修員）との様々な絡みの中から印象に残る思い出とその後の展開について記したい。そうした気持ちになった動機はかつての JICA 研修員の若くしての死である。筆者が初めてタイ王国を訪れたのは 1977 年の 3 月で目的はバンコック郊外のアユタヤに近いランシットに位置するアジア工科大学院を訪れ如何なる事業が展開されているかを視察することであった。と言っても単に見てくるだけではなく滞在中は約 10 回ほど積極的にセミナーの機会を申し出て講義した。アジアを訪れる初めての経験であり、当時はこれらの予防注射が必要であった。またタイ国内では決して生水を飲むな、どうしても喉が渴いたらビンか缶に詰めたコーラかジュースを飲めと言われたものである。タイを訪れる人の多くがお腹を壊し、決まって 2,3 日で下痢になるというのを目の当たりに見てきた。アジア工科大学院のあるランシットは当時その大学のみで周りは全部田んぼであった。3 年ほど前にバンコックは未曾有の洪水で街全体が水に覆われ、かつては国際空港であったドンムアンも洪水対策のための本部を設置し周囲に防壁を設け水の侵入を防ぐ処置をしたが、市民のいくらかが「自分たちが水浸しになっているにもかかわらず政府の役人が水防壁を作って洪水を免れていると言うことで、躊躇なく水防壁の一部を損壊し、政府の姿勢に抗議した経緯がある。現在はアジア工科大学院の隣にタマサート大学のキャンパスができ、またサイエンスパークも設置されている。タマサート大学のキャンパスになった経緯は、タイでアジア大会が開催されそのための必要設備がすべてタマサート大学に移譲されたことに由来する。このアジア大会は高橋尚子がマラソンで優勝したことで日本人にも思い出深いものであり、またアユタヤは山田長政で有名になった日本人町があったことから馴染みの地でもある。1977 年にはアジア工科大学院以外に何もなく、各国政府の寄進で出来上がった大学の校舎以外には何もなかった。しかし不思議な事に当時も全日雨らしきものが何も降らないのに朝起きると周りの水田が海のように水に浸かっている光景に驚いたものである。他の地域で降った雨が低地のバンコックに向かって流れ込むのだという。一般に高速道路は水田や農地からは 1~2 m ほど高くして敷設してあるがひどい時にはその道路さえ冠水し、行き先が見えない道路に停車したトラックから運転手が出てきて網を持ちだして魚を捕獲していたのを思い出す。そのようなところであるから 3 年前の洪水ではタマサート大学もアジア工科大学院も洪水で冠水した。極めて広い範囲が冠水した事になる。チェンマイとバンコックの中間点に位置する所にナコンサワンと言うところがある。この地を境にして南のバンコック寄りの地域はほとんどが冠水した。日系企業も多くが洪水の被害を受けた。工業団地もできるだけ北部地域に作ると、こうした災害からは免れるのではと感じた次第である。

さてタイでの仕事を終えての帰国途中にはフィリピンの国際稲作研究所 (IRRI, International Rice Research Institute) と台湾の国立台湾大学に立ち寄った。いずれの訪問先でも必ずセミナーを行うのが筆者の基本理念であり、この時もそのように対応した事を記憶する。この時のタイでの滞在中にタイ国農業工学会 (Thai Society of Agricultural Engineering) 創設の話があり、依頼を受けて参席したのを記憶する。米国からの関係者も参加し、当時米国ネブラスカ大学の学科長を経て米国農業工学会の会長になった William E. Splinter 教授の話が出たことも覚えている。筆者はこの2年前に2ヶ月間米国を旅し、多くの大学や企業、国の農業関係機関を訪問した。この時の訪問大学の一つがネブラスカ大学であった。ネブラスカ大学は海外から米国に入ってくるトラクタの機種全てにこの大学での試験をうけることを義務付け、性能試験のすべてを公表する画期的な事業を始めた大学として名前が知れ渡っていた。同時に事業を始めた Lester F. Larsen 教授の名前も知らぬ者は居ないくらい有名であった。今では大学に **Lester F. Larsen, Tractor Test and Museum** が開設されている。以下は開館時間などについてのアナウンスである。Tuesday - Friday: 9:00 am - 4:00 pm, First Saturday of the Month: 10:00 am - 2:00 pm, Closed on Sunday, Monday, and major Holidays, **Admission is free, we do however have a \$3 per visitor suggested donation**, The Larsen Tractor Test and Power Museum is supported entirely through donations. この時から約40年になるが自らがタイ農業工学会の永年会員になり、2007年以来、ほぼ毎年参加するようになるうとは想像だにできなかった。ところで本報の主題に入るが、このタイ農業工学会が2012年にチェンマイ大学で開催されるにあたり、会長と幹事の女性2名が随行して、ホストとなるチェンマイ大学工学部の学部長を表敬訪問した。関係者として居合わせた筆者も同席し会談中にその内の1人の女性が、しばらくして思い出したかのように「貴方を覚えている」と切り出した。問いただすと彼女はかつての JICA 研修員で筆者の講義を受講したと言う。当方は数ある研修員全員を覚えているわけではないので記憶は薄かったが、そう言われてみればそうなのかという程度であった。しかし、その後彼女は学会の幹事として必要な役割を果たし、毎年顔を会わせてきた。学会参加に伴う登録料の支払いや開催地近くのホテルの紹介など気軽に相談して、その都度迅速に対応してくれた。その彼女が2016年2月7日の早朝2時頃に急に病気で他界したというのである。学会長自らも「直接貴方に連絡をせず失礼した。丁寧なお悔やみを頂き申し訳ない」との丁寧な返事を頂いた。大学在職時を含め過去40年にわたる JICA 集団研修を経て帰国した研修員は膨大な数に登り、わが国と相手国の双方にとっても貴重な人的財産であり両国の誇りでもある。そうした彼らの一人が、特に若くしてその人生を終える運命になったことは世の定めとは言え極めて残念であり断腸の思いで

ある。「何がために生きてきたのか？」とそのあまりにも早い死を悼まずにはおれない。いずれこうした時期が早晚訪れることは世の常ではあるが特に若者の死は堪えられない。同年代の友人の死も最近耳にすることが多くなった。せめてご苦労様という気持ちだけでも表すために宿舎の中になにか作りの簡単な祭壇を作り、線香とロウソクだけでも手向けて哀悼の意を表している。すぐに飛んで駆けつける事ができないなら、せめてこれぐらいのことはとの思いである。それだけに自分が未だ生（命）を頂いていることに一抹の申し訳無さを感じる。「なぜ自分は？」と言う疑問を押し殺し次のように考え直すようにしている。「お前はまだまだ生き方が足りない、知人は旅だったがお前はまだ駄目だ、旅立つには不十分だ、もっと生きて奉仕しろ、お前は未だ社会に対する奉仕が足りない」と言われているかのようなのである。そう思うといい加減な生き方はできない。自らが果たすべきミッションをひとときの心も緩まず、また無駄なく果たすことに集中せよ」と言う声が聞こえてくるようである。よくよく考えて見ればタイ国農業工学会の創設にも立会い、JICA 研修事業を通じて多くの研修員の巣立ち確認し、チェンマイ大学に身を寄せてからも彼らとの友好的関係が継続し、アジアのどこに行っても彼らとの出会いがある。懐かしくありがたい話である。ハノイでの国際シンポジウムでは在職中の三重大学での課程を終えて参加した化学系の卒業生にも会った。本来専門が異なるのでそのようなことは稀であるが「農」から「生物資源」に学部の名称が変わったことから専門の対象領域が広まった恩恵でもある。インドネシアで開催のアセアン大学コンソーシアムでもフィリピンのかつての研修員に会った。言うまでもなく筆者の記憶はなかったが、相手が思い出して話をするうちに双方ともようやく当時の記憶が戻ってきた。当地チェンマイ大学にも JICA 研修事業に参加し筆者を周知のかつての研修員でもあった教員もいるが、他の大学においても既に学部長補佐や学部長の地位（職階）につき大いに活躍している成長の足跡を垣間見ることは嬉しい限りである。これまで彼らの成長を見ることのみで気を取られて余り気付かなかったが、一方では今回のような悲しいこともある事を再認識したのはうかつであった。ブータン王国のかつての JICA 研修員も不慮の自動車事故で一命を落とした。「極めて残念で悔しい」と言うのが素直な気持ちである。それだけに今回の彼女の死は、それがあまりにも急であり、未だ未婚の若さであっただけにその思いは格別である。ひたすら哀悼の意を表すると共に安らかな眠りを祈念したい。